
列車は進む

一次関数

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

列車は進む

【著者名】

ZZマーク

N1822F

【作者名】

一次関数

【あらすじ】

母は我が子を、列車の窓から投げ捨てた。

(前書き)

この作品は、今度の文化祭で発表しようとしているものです。

女は、娘を走る列車の窓から捨てた。女に迷いは無かつた。娘の叫びと、涙に、ほんの少しの揺らぎも感じることは無かつた。それは女の望んだことであり、娘の望まぬこと。

娘は母を信じていた。この列車に乗つて、一人でこれから訪れる新天地で過ごすのだと、娘は信じていた。自分が列車の窓から投げ捨てられるなど、彼女は考えもしていなかつたのである。

母は自分の願いを叶えた。娘にとつてこれがつらいことではあるのは分かつていて、母はこの先の人生を考えたとき、娘が居てはならないと考へたのだ。これは列車に乗る何日も前から考えていたこと。それまでにも、何度か娘を自分から突き放そうと考えていた。ただその決心がつくことはなかつた。いくらそれが一番良いことであつたとしても、あと一歩が踏み出せなかつたのだ。

娘は自分が宙に浮いていることが情けなくてしようがなかつた。投げ捨てられたのは橋。この橋を越えれば、これから的生活が始まつていた。母はいつからこんなことを考へていたのだろう。橋は高く、湖に落ちるまでにとても時間がかかつた。その間、娘はただそれだけを考え続けた。もしも母のこの考へに気づいていたならば。恐らく、もう会うことのない母親を、彼女は恨まなかつた。恨むべきは己。母はどれだけ悩んだのだろう。その悩みに、どうして気付けなかつたのだろう。娘は、ただ自分が情けなかつた。

母は、隣に座つていた男に微笑みかけた。この男は、これら的新天地で共に過ごすことになる男。男はただうつむいたまま、隣の女のした行為に何も口を出さなかつた。彼は、彼女のした行為

が悪いこととは思っていない。

娘は湖に浮いていた。命は助かったのだ。ただ、その心は死んでいた。母への思い。母の思い。何故それがすれ違いを生んだのだろう。彼女は、橋の足につかり、走る列車を目で追い続けた。

母は男に話していた。これまでの娘との生活を。これからのこと。母に後悔の念は無いはずだった。だが、娘のことを思い出すたびに目から涙がにじみ出る。これで良かったのだ。そう自分に言い聞かせつつも、自分のしてしまったことは許されないことだとということをしだいに理解していった。その場でむせび泣く女の背中を、隣の男は間違つていないとさすった。

娘は列車を見失った。炭の匂いだけがあたりに漂う。娘は迷っていた。もう死ぬべきなのか。それとも残った命を大切にするべきなのか。道徳的には後者が正しいのかもしれない。だが、娘は母に捨てられたという事実を背負つたまま、生きる自信がなかつたのだ。これから母はどのように過ごすのだろう。そう思うと、一人で生きるのがたまらなく怖かったのだ。

列車内は人が多かった。女の行動を目撃したものは何人もいたが、誰も何も言おうとしなかった。皆が彼女の行動を理解し、皆が同じように心を痛めていたからだ。走る列車は轟音を鳴らす。それに紛れて、誰かが言つた。

さつきの子が生きていると良いですね。

子を捨てた女は、ゆっくり頷いた。列車は進む。ナチス軍、ユダヤ人収容所へ。彼女の向う新天地に、未来はあるのだろうか。逃がされた娘に、未来はあるのだろうか。その全てを轟音に巻き込みながら

ら、
列車は進む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1822f/>

列車は進む

2010年11月28日06時40分発行